

Faith to the Atago shrine - And Shogun jizo, the Medieval Victory Guardian Buddha

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野崎, 準 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/23938

愛宕山信仰と勝軍地蔵——中世のある軍神信仰についての覚書——

野 崎 準

- 一. はじめに
- 二. 勝軍地蔵について
- 三. 勝軍地蔵のさまざま
- 四. 戦国大名と勝軍地蔵信仰——みちのくを中心に
- 五. おわりに

一. はじめに

東日本育ちの筆者が京都に移り住み、文化財見学の度に驚いたのは、多くの町の辻に小さな石仏を取めた小堂があり、寺院には膨大な石塔、石仏が並べられていた事であった。これらには本来寺院に立てられた物、付近から出土して寺に納められた物などがあり、嵯峨野の化野念仏寺のように境内を埋め尽くすまでに至ったものがあった(図版一)。

仏教では造塔・造仏は功德があるとされている。しかし古代から近世に至るまで、一般人が信仰の証として小型の物でも石仏や石塔を造るのは大変な事であり、この膨大な石造文化財の群は西日本の

経済力が昔からいかに高かったかを示すものであると感じた。

膨大な石仏がある地は当然ながらその研究も盛んで、町辻にある小さな石仏、寺院や小堂の石仏についての文献は仏教美術史の専門論文から地誌、観光ガイドに至るまで多数に上っているが、文献の量も膨大で、目を通すだけでも大変である。ところが多くの石仏を



図版一 化野念仏寺 石塔石仏群
京都市右京区嵯峨野

これらのガイド本を片手に巡拝しているうちに、京都では知られているが地方にはあまりなく、知られていない石仏もなお残っているのに気が付いた。

地蔵石仏の中に、甲冑を帯び、その上に僧衣を着て錫杖・宝珠に代えて剣や鉾、幡を持つ像がある。蓮台に立つもの、結跏趺坐のもの他に騎馬像で、向かって右に不動明王、左に毘沙門天を脇侍としていたものもある。これは中世以後軍神として広く信仰された「勝軍地蔵」であることを知った。

中世、武士の時代に広まった戦勝を祈願する一群の神仏がある。戦勝神には武士の所属する一族の氏神、例えば源氏は八幡神、平家は厳島神、藤原氏は春日神、橘氏は梅宮神、菅原氏は天満天神、などが戦の時には軍神となって勝利を導いてくれることになっていった。そのため武士の旗印や武器・武器にこれらの氏神の神紋や神号が書かれ、神社には武士から戦勝祈願、御礼のために奉納された甲冑刀剣、武器武器が多数所蔵されているのが普通である。

一方で氏神以外の神、或いは神仏習合で八幡大菩薩や神々の本地仏、それに地蔵菩薩・四天王・毘沙門天などの仏が戦いを助けると言う信仰も生じ、殊に戦国時代には多くの神仏が大名から一般の武士までに信仰された。神文誓書や印章などにこれらの神仏の名が見えることがある。

泰平の江戸時代、文明開化の近代をへてこれらの軍神は次第に忘れられて行き、近年の調査ではすでに軍神としての性格を失ってしまったものも多い。

その周辺を調べてみるとこれらの戦勝を祈る神仏は室町時代に武家の信仰が広まり、近世初期には徳川將軍家をはじめとする武士たちによって江戸周辺でも造像されていた事、また東北の諸大名にも信仰されていたことが分かってきた。

本稿はその「武家に信仰された戦の仏」の一つである勝軍地蔵と、それが「都とみちのく」に及ぼした事象についてのささやかな覚書である。もとより歴史も伝統もある仏教史の世界に生涯一考古学徒の部外者が発言できる立場ではないが、忘れられつつある資料の紹介文として御寛恕を頂きたい。

二．勝軍地蔵について

戦前の地蔵菩薩の研究書、真鍋廣済『地蔵尊の研究』（註一）は室町時代に足利尊氏の熱心な地蔵信仰が「罪障消滅のためのみでなくて：戦捷の守護神としての勝軍地蔵の冥助を祈念」し、一般武人も愛宕、清水、白河（川）の勝軍地蔵などを信仰、これに対し一般庶民は六地藏を信仰していたとし、勝軍地蔵は愛宕山で軼遇突智（かぐつち）神と合体して防火・勝軍の守護となる我が国独自の「勝

軍地藏」が創造され各地に祭祀された。その出典は『蓮華三昧経』で「頭に畢竟空寂の兜を頂き、身に随求陀羅尼の鎧を纏ひ、腰に金剛智の大刀を佩き、発心修業の幡(幡)を纏し、悪行煩惱の軍を斬る剣を執り、左右には掌善掌悪の二童子が侍している」とされている。また地藏菩薩の垂迹神として筆頭に愛宕神社をあげ、各地の愛宕神社にも神仏分離の前には勝軍地藏を本地仏として祀ったとして、日光二荒山神社などを例として挙げている。

『望月仏教大辞典』(註二)には勝軍地藏について以下のように記している。

ショウケンジソウ 勝軍地藏 【菩薩】

坂上田村麻呂東征の時戦勝を祈りし地藏菩薩の名。漢文清水寺縁起に「同(延暦)十七年七月二日延鎮は大將軍と同心合力して更に復た伽藍を造り本尊を安置す(命婦の造る所の像なり)。征夷の為に作る所の地藏菩薩の像は是を勝軍と名付け同く造る所の毘沙門天王は是を勝敵と名付く。地藏を以て本尊宝帳の西脇に安じ、多門を以て同じく宝帳の東脇に安ず」と云々。

また元亨釈書第九延鎮の伝に「將軍先ず鎮に詣て曰はく、師の護念に因りて已に逆賊を誅せり。知らず師の修せし所は何の法なるやと。鎮曰はく我が法の中に勝軍地藏、勝敵毘沙門あり我二像を以て供修せしのみと。將軍便ち二人の矢を拾ひし事を説く。乃ち殿に入りて像を見るに矢傷刀痕其の体に被り又泥土脚に塗れり。將軍大に驚きて事を奏す。帝敬を加ふ」とあり。今本尊十一面観音の脇侍と

して同寺本堂に安置せらるるもの是なり。

又山城愛宕山朝日峯に白雲寺にも勝軍地藏を配し、武家の信仰一時盛なりし如し。京童第十六に「愛宕朝日の峯勝軍地藏と申は百済国日羅の靈なり(中略)又桓武天皇の御時、宕の字を護となしたまひ、愛宕大権現と号す。是勝軍地藏日羅の靈なり」と記せり。

又下総国東葛飾郡野田町西光院所蔵の像は身に甲冑を着し右手に錫杖を把し左手に如意宝珠を載し背に円光あり。軍馬に跨れり。是れ徳川家康が戦勝を祈願せしものと伝ふ。

又中院流では此の菩薩の供養法として勝軍地藏菩薩修業秘供を伝ふ。之に關し寂照堂谷響集第一に「経軌に勝軍の名を説くものなしと雖も而も上古の居士役小角、雲遍上人の如きは視(まのあたり)り感見せし所なり。即ち愛宕大権現と号する者即ち是れなり。其の秘宝は如法の名師の地藏軌等に依りて撰出せし所なること疑ふべからざるなり」と云へり。また清水寺建立記、和文清水寺縁起、本朝高僧侶伝第四十六、洛陽名所集第十、雍州府志第四、京羽二重織留第三、山城名跡順行志第四等に出づ。

とある。

まず古い勝軍地藏の例として清水寺の「勝軍地藏・勝敵毘沙門」が挙げられている。『清水寺史』資料編(註三)は『元亨釈書』巻九「感進」を引き、延暦十七年(七九八)に蝦夷を平定して凱旋した坂上田村麻呂が本尊千手観音の脇侍に両像を祀ったとしている。すなわち蝦夷の高丸との合戦の最中に「官軍矢尽。干時小比丘、及

小男子拾矢与將軍。將軍異之。已將軍射高丸而斃於神樂岡。獻首帝城。」と奇跡が起き、都に凱旋した田村麻呂が延鎮にどのような修法を行ったか尋ねたところ、「鎮曰。我法中有勝軍地蔵、勝敵毘沙門。我造二像供修耳。將軍便説二人拾矢事。乃入殿見像。矢瘢（野崎註・矢のあと）刀痕被其体。又泥土塗脚也。將軍大驚。帝加敬焉。」とあり、『清水寺縁起絵巻』もほぼ同じ話を載せ、延暦十七年の本堂造営の時、本尊千手観音の両脇侍を「右の脇には地藏勝軍薩埵と名付けまつり。左の脇には多門天勝狄大士と称し申ける」と記している。

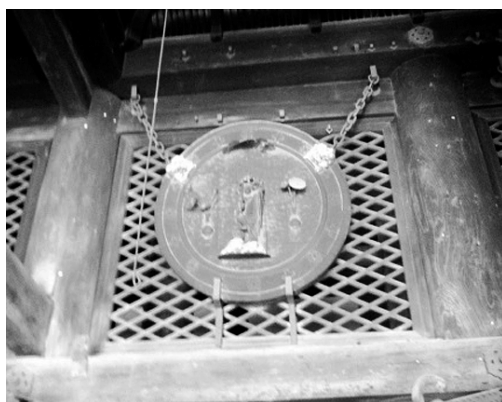
本尊とともに秘仏であるが、厨子の前の懸仏にこの二尊の姿を写しており、配布されている本尊図にも書き込まれている（図版二、三）。

次に愛宕山の勝軍地蔵の文献として一部引用されている『京董』の原文を京都叢書（註四）で見ると

○あたご

愛宕山朝日の峯。勝軍地蔵と申は、百済国日羅の靈なり。敏達天皇十二年にみかど、日羅は賢にして勇ある事をきこしめしをよばれ、百済国に勅使して日羅をめしけるに、百済王おしみてわたされず。又勅使ありてその時來朝せり。帝まつりごとをとほしむるに甲を被（き）て馬に乗り、庁前にすすんでひざまづいて天下をおさめる所以をあらはせり。

また聖徳太子もろもろの童子にまじはりて、ともに日羅の館（た



図版二 京都清水寺
勝軍地蔵懸仏



図版三 京都清水寺
本尊の図、千手観音
と両脇侍

ち）に入りまみえ給ふに、あまたの中もとよりいづれを誰としれぬ事なきに太子をさして、これ神人なりとて三拝ありしとなり。聖徳太子日羅の御弟子にならせ玉へる事あり。

文武の御宇大宝年中に役の行者此山にわけいらんと嵯峨の奥に雲
遍上人といふあり。これを同行にて清滝にいたれるに、雲おこり
いかづちなり、雨ふる事車軸のごとくしてもろもろの天狗大杉の上
にげんず。時に二人秘呪密言をもていのらるるに天はれかがやき、
地蔵、竜樹、富楼那、びしゃもん、あいぜん ひかりをはなちたま
へり。しばらくありて天狗しりぞきぬれば二人山に入、神廟を朝日
のみねにたつ。開山第一祖は雲遍上人なり【雲遍改めて奏
澄と名づく】そののち
光仁帝の御時内州の人藤井氏慶俊【天応元年に僧
都になれる人】（に）勅して中興せ
しむ。和氣の清丸こんりうなり。

また桓武天皇の御時宍を改めて護の字となしたまひ愛宕護山大権
現と号す。是勝軍地蔵日羅の霊なり。

拾遺雑下

なき名のみ高雄の山といひ立る 君はあたごの峯にや有らん 八條
のおほい君

太郎坊と申は文徳天皇の時洛陽の人正六位上紀の朝臣御国の子に
真濟といふ人あり。【楠本の紀傳
正是なり】弘法大師に密教をうけ承和のはじめ
入唐ありて帰朝ののち高雄のみねに入りて十二年出られざりける
に、いつの時なるにや真濟染殿の后を見て心まどひ思ひの火を胸に
たきつひに貞観二年二月に死せり。とし六十一。そのれいこん大て
んぐとなりすなはちあたご山の太郎坊これ也。

もろともにあはれとおもへ天狗たち 鼻より他にいふ事もなし
此山はいくさをまもり、火難をのがしたまへば いづれのありがた
き事かこれにしかんや

ひおどしの鎧や花に勝軍（かちいくさ）

と長文の縁起が紹介されている。

京都の東北にそびえる比叡山に対して西の高山には愛宕山があり、
ここも信仰の山として多くの参拝客をあつめているが（図版四）、
近世以後の愛宕信仰はもっぱら火災よけの神で、京都の民家の台所
には「火廻要鎮」と書かれた愛宕神社の防火札が貼られており、町
辻には上部に常夜燈をともし穴のある愛宕神の石塔が建てられてい
る。そのため勝軍地蔵も現在は火難よけの仏として祀られている事
が多い。



図版四 京都愛宕神社一の鳥居
嵯峨野鳥居前町

『京童』には聖徳太子の仏教の師とされた日羅が登場し、太子信仰が混合している。日羅の物語は『日本書紀』敏達天皇十二年紀にあり、百済にいた日本人で葦北国造（熊本県葦北郡）の子、任那復興のため百済王に依頼して帰国させたが、百済の使者に暗殺された人物とされている。来日し難波の館で迎えの使者と会った時「被甲乗馬門底下」、甲冑を着て騎馬で訪れ、その甲を解いて天皇に奉ったとあるのが甲冑騎馬の勝軍地蔵に通じたからであろうか。『日本書紀』には全身から火焰を発する力をもち、百済の使者が暗殺するには十二月晦日に火が消える時まで待たねばならなかった、などの怪異を述べている。また子供の頃の聖徳太子を見出す話は『聖徳太子伝略』の引用である。『伝略』には更に太子が前世に日羅が弟子であったこと、身から火焰を発していたのは日天を拜んでいたからで、聖人であると語ったとする。『日本書紀』では来日してすぐ暗殺され、僧侶ではないのだが、聖徳太子伝では高僧とされ、聖徳太子絵伝では高麗僧慧慈らとともに僧侶として描かれている。また九州には日羅が開いたという伝えを持つ寺院が多い。

四国八十八カ所の寺院の中にも勝軍地蔵を祀る徳島県板野郡板野町の莊嚴山地蔵寺がある、弘法大師作と伝える本尊は秘仏との事である。

以上のように、これら勝軍地蔵の諸伝承はすでに民間信仰化しており、肝心の典拠となる経典や儀軌がほとんど見えない。地蔵菩薩

信仰の研究文献は多いが、仏教史方面から考察された速水侑『地蔵信仰』（註五）は鎌倉時代の地蔵信仰に続けて足利尊氏が承和四年（一三四八）に「勝軍地蔵像を自ら写した」事を述べ、清水寺縁起とその根拠となったと思われる『与願金剛地蔵菩薩秘記』と、その典拠となった『蓮華三昧経』を考察。地蔵信仰の基本文献であるが、全て室町時代ごろ成立の偽経であるとされた。すなわち仏教正典には見えない信仰であり、天台宗を中心に「京を中心とする民衆の地蔵信仰の高揚期」にこの経典が日本で撰述されたものと考証されている。また愛宕勝軍地蔵は江戸幕府が江戸に勧請（芝・港区愛宕・愛宕山）、武士には勝利の神、庶民には防火の神とし、また勝軍を「將軍」に転訛、各地に祀られた、とされている。

軍神として室町將軍やその側近の信仰を集めた愛宕山には永正十七年（一五二〇）に教学院尾崎坊が、その後大永四年（一五二四）までに福寿院下坊、勝地院長床坊、威徳院西坊、大善院上坊の「愛宕五坊」が建てられ、当初は嵯峨野大覚寺の支配下にあったが、將軍の権威が落ちるに従い白雲寺が愛宕の中心となったという。

この勝軍地蔵が中世には軍神として祀られ、その戦勝祈願の古い例は室町時代で、京都の東山に勝軍地蔵山、勝軍地蔵城があった。所在地は京都市東山区北白川の瓜生山上で、近江から京都に抜ける間道の出口を扼していた。

『京羽二重織留』（註六）に「○護摩 白川村の東北山上に勝軍

地藏堂あり。村中より坂道十八町なり。聖護院御門主一代に一度入峯の前日此堂にのぼり給ひ七ヶ日の間護摩を修し給ふ。又宇治明星山、御室戸寺へも入部の日より七ヶ日止宿ありて護摩を修し給ふ。是古への例也」。また、「○勝軍山城跡 白川の北山上にあり。三好筑前守長慶と佐々木承禎戦捍（せんがん・戦い防ぐ）の時承禎此所に城を構ふ。洛中目下にあり。真に要害の地也。又永祿元年將軍義輝公勝軍山の城に入ると云々」とあり、愛宕山と並ぶ勝軍地藏の地とされていた。現在は愛宕山城の本丸跡に石室があり、勝軍地藏鎮座の処とされている。この像は参詣の便のため山麓に移され、『都名所図会』（註七）には「瓜生山將軍地藏は白川の北にあり。もとは東の峯にあり。宝曆十二年此地に遷す。本尊は石仏の地藏尊。長二尺の像なり。【此地は永祿年中城郭にして足利將軍義輝公、細川晴元、將軍山に籠。城のよし長享記に見えたり。其比は此の尊像も城中に安置せし也】」。とある。現在はこの堂も廢墟となり、勝軍地藏像は更に別の寺に遷されたとの事である。

またこの將軍地藏城は同時代史料としては『巖助大僧正記』大永七年（一五二七）に「東山勝軍地藏山、右京兆（細川高国）城を構ふ」などの記事があり、最後は織田信長の元龜元年（一五七〇）に明智光秀がいたことが知られている（註八）。

ここは大阪市から間道を越えて東山の北から京都の中心部に通じる「山中峠越え」の出口にあたる要衝で、近江から都をうかがう勢力とそれを阻止しようとする都の勢力にとって重要な地点だったようである。そのためか京都東山にある將軍塚と混同している例が江戸時代の地誌にいくつか見られる。

どこまで正確な図なのか不明だが、勝軍地藏城の地藏の説明図（図版五）の地藏像は甲冑と僧衣を着、岩上に結跏趺坐して右手に劍、左手に幡、乃ち「幅」の部分が下に垂れる軍旗を持っている。



図版五 京都市東山区勝軍地藏山
説明図

愛宕神社も本地勝軍地藏菩薩や大天狗太郎坊などが軍神として信仰されていた。前述のように近世以後火難よけの神としての信仰が篤くなり、更に明治の廢仏で愛宕山上の仏教色が一掃されてしまうと、勝軍地藏も姿を消し「境内地藏堂にはもと愛宕神社本地仏勝軍地藏を祀る」と寺伝にある寺院がかるうじてその信仰を伝えていく。平成二三年に佛敎大学宗教文化ミュージアムで開催された「愛宕山をめぐる神と仏」展（註九）では白雲寺の本地仏は京都市西京区大原野の金藏寺に移されたとされており、勝軍地藏騎馬像の写真

を掲載している。白馬に乗る天部風の甲冑・僧衣着用の地蔵菩薩で右手に剣、左手に幡を持つ。光背を含め高さ六二センチで、江戸時代のものとされている。

なお京都寺院の観光案内を丁寧に見ていくと、嵯峨野の奥、右京区嵯峨野鳥居本町の愛宕山登山口にある愛宕念仏寺、上京区堀川の興正寺、下京区七条の権現寺、東山区粟田口の尊勝院なども「愛宕白雲寺の勝軍地蔵を伝える」と書かれている。観光寺院でなく大半が非公開の寺院であり、地蔵盆の時でもないと真偽を確認する述はない。京都の地蔵巡りの書に紹介されているのは愛宕念仏寺の地蔵であるが、この像は僧衣で右手は膝上で掌を上に向け、左手に宝珠をもち蓮台上に結跏趺坐する像であり騎馬像でも武装像でもない

(註一〇)

- (註一) 真鍋廣濟『地蔵信仰の研究』磯部甲陽堂 昭和一六年
(註二) 望月信了編『望月仏教大辞典』昭和八年(昭和三八年・第三版による)
(註三) 清水寺史編纂委員会編『清水寺史』第三巻 史料 平成一六(二〇〇六)
(註四) 「京童」『新修京都叢書』第一巻所収。明暦四年(一六五八)初版。なお一六でなく一六である。
(註五) 速水侑『地蔵信仰』塙新書四九、昭和五十年(一九七五)一三二—一三九頁
(註六) 「京羽二重織留」『新修京都叢書』第二巻所収。元禄二年(一六八九)初版

(註七) 『都名所図会』『新修京都叢書』第六巻所収。安永九年(一七八〇)初版

(註八) 勝軍地蔵城は『史料・京都の歴史』八の白川村の歴史の章が詳しい
(註九) 佛教学宗教学文化ミュージアム『愛宕山をめぐる神と仏』展図録 平成二三年

(註一〇) 武村俊則『新版・京のお地蔵さん』京都新聞出版センター 平成一七年(二〇〇五)一七七頁 愛宕念仏寺火除地蔵

三. 勝軍地蔵像のさまざま

前章で述べたように、勝軍地蔵には時代により、宗派により幾つかの姿がある。その例を挙げる。

(一) 武装立像の勝軍地蔵像

古くから信仰されていたらしい清水寺の勝軍地蔵は秘仏であるが、図版二、三に見えるように画像に画かれ、また懸仏に表現されている姿は甲冑を帯び、兜をかぶり、その上から足首に達する長い僧衣をまとい、岩坐の上で踏割蓮台の右足を軽く上げた姿である。右手には両刃の剣、左手は上げて幡を支えている。勝敵毘沙門の懸仏は一般の左手に宝塔、右手に鉾をもつ姿ではなく右手を腰に当て、左手に鉾を持つ、右手を腰に当てるのは鞍馬寺の毘沙門天像に似た姿である。現在の前立懸仏は木の円盤に銅板を被せ、浮彫状の仏体を張り付けた物で江戸時代初期寛永十年(一六三三)の銘がある(註一一)。秘仏本尊の脇侍も同じ形とされている。

なお奥ノ院観音堂で発行されている画像の三面手観音像の脇仏として描かれている地蔵は武装をしておらず、左手に宝珠、右手に錫杖の姿であった。秘仏本尊の脇侍もこの姿とのことである。

その後の清水寺の膨大な古文書や縁起にはあまりこの「勝軍地蔵・勝敵毘沙門」の事は話題にならないようだが、仏教の天部のような甲冑を付け、剣や幡、鉾を持つ地蔵菩薩像は影響が大きかったようで、平成二三年に安土城考古博物館で開催された『武将が継った神仏たち』（註一一）に江戸時代の作として埼玉県秩父市円融寺と京都市東山区来迎院の「伝・大石良雄念持仏」として同形の勝軍地蔵像が出陳された。石仏にも類例が多い。現代のものだが京都市東山区泉涌寺の塔頭即成院には昭和一六年（一九四一）十月、という太平洋戦争前後に立てられたこの形式の將軍地蔵石像がある（図版六）。左手に宝珠、右手は青銅の錫杖をさしこんであるが、これは新しく、後補のものかも知れない。



図版六 京都市東山区
即成院 勝軍地蔵石仏

この形式を「甲冑武装の立像」と仮称する。甲冑に僧衣、剣と幡を持つ立像である。

(二) 坐像の勝軍地蔵像

清水寺勝軍地蔵のように天部像のような甲冑をつけ、その上に僧衣を纏った地蔵像が、これも普通の地蔵菩薩坐像のように岩坐の上に腰を下ろした姿の物がある。大阪市天王寺区上本町の「將軍」地蔵は、昭和二八年の由来を書いた石碑によると江戸時代天保十三年（一八四二）の作で、「任那の日羅公仏化の姿。坂上田村麻呂の軍功にも靈驗あり、数回の移転の後現在地に祀られた」旨記されている。

一般の地蔵菩薩坐像のように結跏趺坐、左手に宝珠、右手は持物を差し込むようになっており、現在は錫杖を持って甲冑を纏う他は普通の地蔵菩薩の姿であり、その甲冑も布の涎掛をかけて見えないように安置されている（図版七）。

この形式の大きな銅像がある。大阪市天王寺区空堀町の善福寺境内に丈六ほどの巨像で蓮台に結跏趺坐した勝軍地蔵像がある（図版八）。背中の上の方に銘文があり、「明治四十年五月廿一日為日露戦病死者記念……」まで辛うじて読むことができた。今は上屋がかけられているが、緑青に覆われているので、もとは露坐であったのかも知れない。右手に剣、左手に宝珠を持ち蓮台の上に結跏趺坐している。明治四〇年（一九〇七）、日露戦争（一九〇四～〇五）の戦病死者供養の造仏である。



図版七 大阪市天王寺区上本町
勝軍地藏石仏
涎懸を下げると甲冑は
見えない



図版八 大阪市天王寺区空堀町
善福寺 勝軍地藏銅仏

なお前述の「勝軍地藏城」の勝軍地藏像も説明板の図が正しければこれと同じ、甲冑に僧衣を纏い剣と幡を持ち、結跏趺坐の姿であった。

甲冑と僧衣を纏い、結跏趺坐する像を「甲冑武装の座像」と仮称する。

(三) 騎馬の勝軍地藏像

『愛宕勝軍地藏』として古来広く知られている姿は甲冑を着用した上に僧衣をマントのようにまとい、白馬に乗って剣と幡を持つ姿である。前記『武将が緋つた神仏たち』展ではその最古の像と考証されている山梨県山梨市清水寺の勝軍地藏像を大きく取り上げていた。台座底面に「七条大仏師 宮内卿法印 康清作」とあり、康清は元龜四年（一五七三）京都楽音寺薬師、天正十一年（一五八三）京都大徳寺総見院織田信長像（重文）などを製作した人物とされている。また滋賀県彦根市仙琳寺の、同地の旧愛宕神社と関係があるらしい勝軍地藏騎馬像も展示されていた。

この勝軍地藏像を小振りにしたような念持仏が福島県相馬市にあると元福島県考古学会長の鈴木啓先生からお知らせいただき、それを報道した新聞の切り抜きも頂いた（註一三）。小型ながら騎馬の勝軍地藏像で左右脇侍は不動明王・毘沙門天と愛宕山本地仏曼荼羅などに見える姿と同じである。戦国時代相馬義胤の念持仏と伝え、山梨県清水寺と同様「京仏師康清」の銘があり、本像は現在相馬村神社に所蔵されている由である。

奈良市の南東、重文丈六地藏菩薩像で知られる福智院は境内に勝軍地藏を祀り、画像入りのお札も頒布している。甲冑乗馬、右手に錫杖、左手に宝珠をもつ（図版九）。境内には勝軍地藏の小堂があり、現代の作であるが甲冑騎馬の勝軍地藏で、向かって右に不動明王、



図版九 奈良市福智院 勝軍地藏の印

左に毘沙門天が併走している（図版一〇）。

福地院のそば笠屋町に「鎧地藏尊」の小堂がある、平成二八年三月の史迹美術同政会で拝観させて頂いた（図版一一）。本尊は秘仏とのことで詳細は遠慮するが上部三角形の碑の中央上段に岩坐に立つ騎馬像の甲冑姿の地藏菩薩が半肉彫で彫られており、向かって右に岩坐に立ち剣と繩をもつ不動明王、左に金剛杖と宝塔をもつ毘沙門天が立つ。下半分には梵字と漢字が見える、梵字最上段は中央がカ（地藏菩薩）、右がカーン（不動明王）、左がバ（毘沙門天）、文字は「水天火天・・・」であった。史迹美術同政会の配布資料には高さ七六センチ、幅三〇センチの花崗岩製、室町時代とされている。



図版一一 奈良市笠屋町 勝軍地藏石仏



図版一〇 奈良市福智院 勝軍地藏の銅仏

本尊前立の像は木彫りで、ほぼ同じ姿の甲冑騎馬の地蔵菩薩で右手に錫杖、左手の持物は失われていた。右不動明王、左毘沙門天の脇侍がある（図版一二）。本尊・前立とも地蔵像は円形の光背をもち額に白毫を表すなど一般の勝軍地蔵と同じであるが僧衣を着ておらず、鎧の肩に天部のような天衣をかけている。



図版一二 笠屋町勝軍地蔵の前立
仏、木造

笠屋町自治会『鎧地蔵尊縁起』（註一四）には近世奈良の地誌「奈良坊目拙解（享保二十年 一七三五）」を再録、「鎧地蔵堂。本尊右造勝軍地蔵、脇士毘沙門・不動」とし、福智院の境界四隅の勝軍地蔵祠の一つが残ったもの、後世の愛宕権現の本地仏ではなく京都清水寺の勝軍地蔵であると『元享釈書』を引いて説明している。一方で防火の功德も述べられているので近世の愛宕勝軍地蔵の影響がないとは言えない。奈良の寺院としては天台密教の愛宕山白雲寺の本尊と関係ありとは認めなかったのであろうか。

平成二三年に佛教大学宗教文化ミュージアムで開催された「愛宕山をめぐる神と仏」展では写真版であるが旧愛宕山白雲寺の本尊であった勝軍地蔵騎馬像が紹介された。白馬にのり右手に剣、左手に幡を持つ。江戸時代になってからの作品とされ、曼荼羅類と違い白馬の馬具が省略されているとの説明であった（註一五）。

本図録に見える愛宕白雲寺本地仏の勝軍地蔵像も僧衣ではなく天部が甲冑の上にまとう天衣のような幅の狭い布を両肩にかけている。写真で拝見した四国地蔵寺の秘仏本尊の前立像の勝軍地蔵像も騎馬で、僧衣は付けていないようである。

大阪市中央区久太郎の撰津一の宮坐摩神社末社の陶器神社は大坂空襲焼失前には地蔵堂があり、地蔵像は『撰津名所図会』に「甲冑を帯し馬に乗ず」とある由。現在は防火の神「火防陶器神社」となり富岡鉄斎書の『火要鎮』のお札を配布。地蔵像は焼失を免れたのか現在は地蔵盆の時だけ公開するという（図版一三）。

この形式の像を「甲冑武装の騎馬像」と仮称するが、僧衣を纏うものと僧衣が省略され天衣のように表現されるものとに分けられそうである。

勝軍地蔵についてはもう一つ、「石神」シヤグジが將軍と似た音なので混同され、將軍地蔵となった」という説があり、現在でも石地蔵の見学記に時折引用されている。柳田國男『石神問答』で「シヤ



図版一三 大阪中央区久太郎町坐摩神社。
末社陶器神社に勝軍地蔵騎馬像を伝える

「グジ」の語源を探求する内の、各地の「將軍塚」伝説と「將軍地蔵」との関係があるのではという問答が元になっているようである。山中笑がその回答として京都愛宕山の勝軍地蔵を説明し、武装姿は修羅道を濟度する金剛幢地蔵が幡を持つのと関係があるのでは、などと説明し、「勝軍。將軍は共にあて字にて語の意味は外に在るべしとの貴説、何とも申し分け兼ね候」と否定されているのであるが(註一六)。

(註一一) 清水寺史編纂委員会編『清水寺史』第四卷 二〇一二年
(註一二) 安土城考古博物館『武將が継った神仏たち』展示図録 平成二三
年

(註一三) 『福島民友新聞』平成十四年六月十一日、同三年三月九日
(註一四) 奈良市笠屋町自治会編『鎧地蔵尊縁起』パンフレット
(註一五) 佛教大学宗教文化ミュージアム『愛宕山をめぐる神と仏』展図
録 平成三年
○ 所収

四. 戦国大名と勝軍地蔵信仰——みちのくを中心に

序論で述べたように、室町幕府の権威が失墜し天下が麻の如く乱れた室町時代後期になると、諸大名は打ち続く戦乱の勝利を氏神、菩提寺の本尊のみならず戦勝の現世利益のある神仏を頼った。

一般に戦争勝利の祈願は八幡大菩薩、不動明王、妙見菩薩、毘沙門天、弁財天、妙見菩薩、それに勝軍地蔵などがあり、天狗・摩利支天・飯綱権現等も含まれる。

戦国武将上杉謙信の印に「日天、摩利支天、勝軍地蔵」の文字があるのは有名であり、その宿敵武田家にも前章で述べたように山梨市の清水寺に「七条大仏師 宮内卿法印 康清作」銘の勝軍地蔵騎馬像があり、前述のように安土城考古博物館に展示された(註一二文献)。作者康清は甲府市恵林寺の不動明王の作者との伝承もあり、京都大徳寺総見院の織田信長像(重文)などの製作者として知られている都の仏師である。これが騎馬像の最古の例と考えられている。

天正十年（一五八七）六月の本能寺の変の前夜に明智光秀が愛宕山に籠り、『信長公記』には「五月二十六日」坂本を打立ち丹波亀山の居城に至って参着。次日、二十七日に愛宕山へ仏詣。一夜参籠致し、惟任日向守心持御座候哉。神前に参り太郎坊の御前にて二度三度逆籤を取りたる由申し候」と、太郎坊天狗の前で籤を引いたと記している。翌二八日に西坊での「ときは今あめが下知る五月哉」の発句で知られる連歌興行を行い六月一日未明に本能寺の変を実行した。

古来籤とは神意をうかがう物で、気に入らない卦が出たと言って引き直してはならぬのであるが、高柳光寿博士は随筆「光秀の謀反」〔『青史端紅』註一七〕で、謀反の成功だけでなく天下を取った後の諸問題についてまで考えて「それを勝軍地蔵にまかせたのである」とされた。筆者は大天狗太郎坊が出てくるのが気になっている。

佛敎大学の愛宕山関係の展示で、愛宕の軍神とは元々は大天狗太郎坊で、室町幕府管領細川政元がその信仰が篤かったことを説明し、現在も愛宕神社に残る仙台藩士片倉小十郎（重綱）の大坂夏陣戦勝御礼の大絵馬は、僧衣を纏い猪に乗り太刀を佩び、地蔵の持物であるはずの錫杖を振りかざす烏天狗であると写真・箱書きを添えて説明していた。

現在の愛宕神社にも天狗像をまつる物が多いが、廃仏で本地仏の地蔵菩薩を片付けただけでは即断できないことを注意するべきだろう。乗り物が猪になっているのは関東地方の勝軍地蔵石像にも見

られる。

徳川家でも愛宕権現の信仰篤く、江戸には芝の愛宕山に愛宕神を勧請、勝軍地蔵をまつる寺も多数あるが、東北地方ではどうだろうか。本来なら東北各地の愛宕神社巡礼を行ってから報告するべき事であるが、いま手元にある過去の情報ノートから気が付いたものを挙げる。

東北地方は愛宕神社が多い地域とされているが、多くは城下町の建設に伴い、城下を見下ろす近郊の山に鎮守と防火の目的で勧請されたものが多い。宮城県仙台市の愛宕神社は伊達政宗の仙台城建設に伴い岩出山から移動してきたものであるが、広瀬川と、旧竜の口峡谷の河跡谷に挟まれた急峻の地で仙台城下町を見下ろすことができる。

安永年間（一七七二〜八一）ころ成立と言う『残月臺本荒萩』（註一八）にはこの愛宕神社を「伊達米沢輝宗公。當社守本尊の由御宝物数々あり」とし、京都の愛宕神社の由緒を語り、祭礼が六月二十四日、別当が誓願寺であることを記している。

仙台の愛宕山には隣接して虚空藏堂があり、別当寺は大満寺、もと仙台城本丸の地にあり、「慶長年中太守政宗公御本丸御築の節。當山へ移さる」としている。

思いがけず伊達輝宗の時代から愛宕神が伊達家の「守本尊」であったと記憶されていた。おそらくは米沢、会津若松、岩出山、仙台と

伊達家に伴って移転を繰り返したのであろう。

伊達氏の旧領であった福島県伊達郡にも愛宕神社は多いが、幕末に編纂された「信達一統志」（註一九）では伊達郡小手荘下糠田邑の愛宕山について

「愛宕権現 本尊將軍地蔵尊 堂二間半四面。山上に鎮座あり。抑當山は地藏竜樹撰化の地として唐土の五台山に似たり、大唐日羅の變作れり、擬又將軍地蔵尊は修羅鬪争の瞋志を調伏し、泰平静謐を加え給ふ忍辱慈悲の尊体なれば、其利生遍く衆生に施し給ひ其徳いよいよ尊くして太平安全を守り給ふとかや」と、僅かに軍神の面影を伝えている。

最近の考古学的調査で米沢時代の伊達家の本拠地であると認められてきた山形県米沢市の館山遺跡は北に広がる旧城下地域に「勝軍地藏堂」の名が地図に記入されている。また上杉時代に米沢城下を守った愛宕神社は館山遺跡の南にある愛宕山麓の遠山にあるが、奈良時代勧請、大江・伊達・上杉など歴代領主の崇敬あり、上杉氏より古いとされている。

伊達氏のライバルであった相馬義胤の念持仏も愛宕勝軍地藏であったことは前に述べたが、もう一人の好敵手、最上義光が天正十三年（一五八五）に勧請したと伝える愛宕神社が山形県天童市北目にある。

津軽藩では藩祖・津軽為信勧請という愛宕神社と橋雲寺がある。『青森県百科事典』（註二〇）の「愛宕信仰」の項目では愛宕山教学院の祐海、（橋雲寺）の項では最勝院の眼尊）の勧めで最初慶長六年（一六〇一）に浅瀬石村（現黒石市）に、のち二代藩主信牧が霊夢により中（津軽）郡岩木町（現弘前市内）に勧請した。橋雲寺本尊勝軍地藏は騎馬像で「山城国仏師五条大式作」とある。

東北では戦国大名の家臣にも愛宕信仰が篤い武士がいた。愛宕山の絵馬で述べた伊達家家臣（一家）、白石城主の片倉小十郎重綱は大坂夏の陣で愛宕神の助けにより大功を挙げたとあるが、これは元和元年（一六一五）の河内道明寺で後藤基次・薄田兼相の夜討ちを撃退し、真田信繁（幸村）とも互角の戦いをした事をさしているのであろう。現在伝えられている片倉重綱の甲冑は兜に「愛宕大権現守護所」と書かれた金の短冊が前立としてつけられている。また一門筆頭の巨理要害の伊達成実は、明治に北海道伊達郡（現伊達市）に移動した文書中に京都愛宕神社勧請の事が見える（註二一）。すなわち文化四年（一八〇七）、時の当主伊達実賀より幕府老中堀田正教宛て書簡に「むかしその遠つおやなる藤原のしげ実（伊達成実）」が百済（朝鮮）に赴く時京の愛宕よりいただいた像を懐中して、無事帰国できたので巨理に祭った事を記している。

宮城県白石市は白石城の西、福岡に、同巨理郡巨理町は巨理城の西愛宕前に愛宕山がある。巨理愛宕神社は現在巨理神社に合祀され、現地に神社はない。

その他、京都で閲覧できる資料として昭和五十年代に各県の新聞社、テレビ局などが編纂した『○○県百科事典』の各県「愛宕信仰」の項目を見て気が付いた事を述べる。愛宕神社は秋田県内に一二一社、福島県は一〇一社（中通六〇、会津一六、浜通二五）、宮城県八六社、岩手県二九社となっている。青森県は同県神社庁のホームページに弘前市等八社が見られた。近世には鎮守より防火・火伏せの神としての信仰が中心となり、勝軍地蔵や太郎坊天狗の戦勝祈願の記憶は薄れたようで、その記事はほとんど見当たらない。

このように東北の愛宕神信仰は戦国時代には戦勝の守護として、全国的な戦勝祈願の神仏として広まったものと思われるが、近世にはすでに集落の防火・鎮守の神としての信仰が普及してしまい、その軍神としての信仰は忘れられてきたようである。各地に残る愛宕神社に廃仏以前の僅かな伝承でも残っていればその検討によってその淵源の信仰の姿を考察したいものである。

最後に、近世を通じて防火の神として信仰された愛宕神社と勝軍地蔵であるが、明治、昭和初期にも戦勝祈願、戦病死者供養として復活したようである。『武将が継った神仏たち』にも昭和一五年、東京都台東区安立院「石造將軍地蔵像浮彫石碑」の写真を掲げている。甲冑に錫杖・宝珠を持ち僧衣は見え、牙をむいた猪に乗っている（註一二文献）。ただし関西に関しては愛宕神社の甲冑騎馬像でなく、清水寺勝軍地蔵のような立ち姿、結跏趺坐の姿につくられ

ている。これは坂上田村麻呂がこの時代の英雄として再評価されたことと関わるのかも知れない。

- （註一七）高柳光寿「光秀の謀反」『青史端紅』所収 春秋社 昭和五二年
- （註一八）『残月臺本荒秋』『仙台叢書』一所収 大正十一年
- （註一九）『信達一統志』 志田正徳、嘉永六年一八五三ごろ 『岩磐史料叢書』所収 昭和四六年

- （註二〇）東奥日報社編『青森県百科事典』昭和五六年
- （註二一）伊達市開拓記念館編『巨理伊達家史料』平成二三年

五. おわりに

京都の町中の石仏からたどり始め、愛宕神社の勝軍地蔵とその戦国時代の軍神としての姿を追いかけて見た。

室町將軍以下、室町時代の武士の信仰を集め、江戸時代初期までに城下町の鎮守神として各地に勧請されたが、江戸時代には防火、盗賊など家難よけの神となり、軍神としての姿は忘れられていったことが分かった。

江戸時代の軍学書、例えば『貞丈雜記』などを見ると、武家の神仏に関する記事は意外と少なく、また「神仏類の部・夢想」の項目に「本人の思いつきであつても）軍の謀（はかりごと）の為には夢想と名付け託宣といふらして身方（味方）の諸士の氣をばげまし敵の氣をくじく手だてに用うることあり」と、武將の継った神仏に

対しても結構合理的に考えていたことが分かる。これはこの時代に読まれていた中国の武経書にも同様の記述があり、戦意高揚や相手の威圧に用いても戦闘はあくまでも合理的に行うのが戦国武将の本心だったのであろう。

都の勝軍地蔵像から愛宕山の軍神、その武士による信仰の広がりを追いかけて、思いがけず都の愛宕山と東北の諸大名との関係に及んだ。地方におけるこのような信仰とその遺物はまだ研究が及んでいない地域も多いと思ひ報告した次第である。この調査・研究が次の世代の学究の方々に取り上げられ研究を深めて頂ければ幸いである。

今回も資料の存在、情報など多くの方々のご援助と激励をいただいた。衷心より感謝申し上げる次第である。

(平成二八年七月三一日)

